

宮津市養老地域の生活に見る「遊び」「野遊び」の発見-自然共生型ライフスタイル研究の一視点として

人間環境学部環境デザイン学科 三橋俊雄

1.はじめに

1) 共育の里づくり事業

都市と地域の交流を目指す京都府の「共育の里づくり事業」の活動に、都市委員として2003年度から2004年度まで関わった。養老地域を対象とした、稲刈り、海釣り祭り、海の幸山の幸体験交流事業などに地域委員とともに参加し、地域住民との共働による地域活性化に関する検討を重ねながら、継続的な地域調査研究を進めてきた。

2) 本年度の調査:「遊び」「野遊び」調査

上記の調査によって発見・体験してきた資源の蓄積から「遊び」の要素を抽出し、それらの詳細を把握するための補足調査を実施した。加えて、「遊び」「野遊び(マイナーサブシステム)」に関する事例調査を、実地体験を含めて進めてきた。これまでに調査した「遊び」「野遊び」の事例を表1に示す。

表1 「遊び」「野遊び」の事例(50音順)

遊びの名前	内容
石なご	片手で石を投げ、落ちてくる前に同じ手で地面の石を拾い、落ちてきた石をまた同じ手で受け止める。成功したら拾う石の数が一つずつ増える。掛け声は「ひとくいしょう、ふたくいしょう…」。上手くできない子のために「かにいき」という簡単な遊び方もある。
うさぎとり	けもの道に針金を罫をしかける。
海遊び	ハマチ(スナガニ)とり、タコ釣り、底さし網・浮きさし網(大人)、ワカメ・テングサ・ふくらし藻とり
大縄跳び	縄は親にたのんで作ってもらった。8の字とびで飛んでは抜ける。
おちゃぼこ(お手玉)	小豆のくず、学生のボタン、足袋の留め金を入れて音を良くした。
大人になってから	お酒づくり、柿渋染め、豆腐づくり、畑づくり
鬼ごっこ	神社や広場で遊んだ。
おぼけやしき	夏になると子どもたちだけでお化け屋敷をつくり、大人を招待しておどろかせた。
おはじき	広場で遊ぶ。
かえるとり	草を輪にして、かえるが輪をくぐったら素早く引き、捕らえた。
かけっこ	神社の広場でやった。
川遊び	泳ぐ、ズガニ(モクズガニ)とり、サワガニとり、ヤマ(グズツボ)釣り、ヤゴとり、アユつかみ、マスつかみ、エビとり、ザリガニとり、ドジョウ釣り、カメ(インガメ、クサガメ)とり、メダカとり、ウナギとり、もんどり漁、船でおもりづくり
かんけり	広場で遊ぶ。
基地作り	中で干し芋を作ったりキュウリを食べた。木の上に作った子もいた。
木登り	神社の大木に登った。
釘立て	釘を地面に投げ、刺さったところを線で結ぶ。相手の線を閉じ込めた方の勝ち。
けんぱ	砂の上に棒で線を引いて遊ぶ。四角いかたちや丸いかたちがある。
陣取り	じゃんけんを勝ち抜きで行き、負けたら相手の陣地に移動する。
砂遊び	砂とり、砂でお茶碗づくりなど
節分であゆ玉まき	節分に餅でつくったまゆ玉(養蚕の繁盛を願い)をまき、後でゆがいて食べた。
竹馬	親に作ってもらい、広場や神社で遊んだ。
竹スキー・竹そり	モウソウ竹を火であぶって曲げたものに自転車のチューブで足を固定。箱をつけるとそりになる。
たにしひらい	ジュル(水分の多い)田でタニシをひらい、家の人に料理してもらった。
探検隊	子どもたちだけでどこまで行けるか、川の上流や山の奥まで探検した。
ちゃんばら	恰好の良い木や竹を拾って遊ぶ。
トリモチで鳥捕り	秘密基地の中でよく鳥を捕った。
花祭り	お釈迦様の誕生日にお花をつんで厨子に貼る。
パン(めんこ)	油をしみ込ませて重さを出した「油パン」を作った。
ビー玉遊び	地面にあけた穴にビー玉を入れる。ビー玉をはじいて遊ぶ。
舟屋でかくれんぼ	昔は舟屋に子どもたちが自由に出入りしても良かった。
ボール遊び	屋根にボールを投げながら、誰かの名前を呼ぶ。呼ばれた相手は屋根からはね返ってきたボールを受け取り、誰かに当てなければオニになる。
ホロ玉鉄砲	ホロ玉(リュウノヒゲの実)を飛ばして遊ぶしのべ竹の鉄砲。別称ホリ玉・ホロホロ玉鉄砲。
虫遊び	せみ・トンボ(ギンヤンマ、オニヤンマ、シオカラトンボ)・玉虫・ミヤマクワガタ・イナゴとり、アブにひもをつける、カブトムシに荷物を引かせる
野草つみ(おやつ)	柿(おせがき)・さざんきよ・ふなび(桑の実)・ぐんだ(山ぶどう)・莓・梅の実・イワナンぼり、栗・椎の実ひらい、スイトン・だんじん(いたどり)・つんばな(チビク)の穂・めんめんかじ(シュラン)の茎・イカリソウの花・コケンジョの花を食べる、ツツジ・ツバキの花の蜜を吸う
野草つみ(食事)	山菜つみ(ワラビ、ノブキ、コゴミ、ゼンマイ、セリ、ミツバ、ドクダミ)、アケビとり、ジネンジョ堀り
野草で遊ぶ	花輪づくり、四葉探し、笹舟、タンポポの水車、ツクシ遊び、えのころぐさ(ねこじやらし)でこそばす、すもとりぐさ(オオバコ)で草すもう、ほおずき、じじゃあ(どんぐり)のコマ、タンポポ・からすのえんどう・ツバキの葉・笹の新葉・ヒエツバナで草笛、アサガオで色水づくり、つる探し、イヌタデ・きゅる草(ミソソバ)でままごと、マオウでつぼう
雪遊び	落とし穴、かまくら、きんかん(雪玉どうしをぶつけあい強度を競う)、雪合戦、つららを食べる

## 2. 遊びの価値

「遊び」は、子どもが人生において最初に出会う社会的活動であるとともに、自然と自らが関わっていく最初のプロセスである。「遊び」は、将来、自然のなかで、自然と共に生きていくための、そして、地域コミュニティのなかで生きていくための大切な一歩でもある。

そうした「遊び」の機能・役割を念頭に置きながら、地域でいまも語られ、行われてきた「(自然や社会と結びついた)遊び」について、生活の現場における人びとの「声」を基調として、本研究を進めてきた。

その結果、「遊び」は、人間が、自然との濃密な関わりの中で、「自然からいただく楽しみ」「自然と触れあう楽しみ」として、自らの経験や社会(共同体)から生み出されてきた、生活文化のひとつの「かたち」であることが読み取れた。

しかし、その「遊び」は、地域の自然や日常の生活から紡ぎ出されてきた大切な知恵、生活文化でありながら、今日、その価値が適正に認識されていないことも事実である。それは、誰もが無意識のうちに体験・体得し、ごく当然の行為として実行されきた「遊び」が、急激な生活文化の変容のなかで遠い存在となり、あらためてその価値について再考することがなくなったからではないだろうか。

本研究を通して、「遊び」を、自然や社会と共存共生していくための重要な要素、価値として再確認し、その遊びを支えてきた当該地域の自然・社会・文化の「豊かさ」について、さらにその「遊び」の今日的な「あり方」について、検討した。

## 3. 野遊び(マイナーサブシステム)の特質

本研究で扱う「野遊び(マイナーサブシステム)」について、その特質を以下に示す。

- 1) 経済的には、主要な生業(main subsistence)に対する副次的な生業(subordinate subsistence)といえる。
- 2) マイナー・サブシステムとして扱おうとしている農耕民がおこなう狩猟活動、漁労活動、採集活動などは、通常、娯楽性の強い生産活動であり、気晴らしであり、遊びの色彩が濃く、たいていは一部の人間だけがおこなう趣味としての性格を強くもつものである。
- 3) マイナー・サブシステムは、たいした経済的意味はない。
- 4) 多くの場合、伝統的なもので、かなり長い歴史をもっている。
- 5) 捕獲や取得という段階から、消費ないしは販売まで直接的につながっている。
- 6) 自然との密接な関わりのもとに現れる。
- 7) 比較的単純な技術水準にあつて、それゆえに、高度な技法が必要とされる。
- 8) マイナー・サブシステムの成果は、技法の習熟、長年積み上げた知識などによって、大きな個人差を示す。
- 9) マイナー・サブシステムをおこなうものは、少数派に属するが、彼らは、互いに競争しつつ、先輩たちから知識を脈々と受け継ぎ、自らも創意工夫をこらして、成果拡大に努力してきた。
- 10) マイナー・サブシステムの成果の個人差は、彼らの喜びと誇りの源泉となる。
- 11) マイナー・サブシステムがあくまでマイナーであるための大きな理由は、その対象が、大量に狩猟採集しえない性質をもっているからともいえる。
- 12) マイナー・サブシステムの対象は、その分布が空間的にばらばらであったり、ごく限られた季節にのみ集中するとか、人間の目に触れるという性質をもっている。

(以上、松井健、マイナー・サブシステムの世界、篠原徹(編)、民俗の技術、朝倉書店、247-254、1998より抽出。)

## 4. 遊び、野遊び、生業へと続く自然共生

幼児期に「遊び」を通して得た自然に関する知識、自然と付き合う能力は、やがて子どもの「遊び」から大人の遊びへ、すなわち、素手の技による自然との共生の姿、「野遊び(マイナーサブシステム)」へと、連続的に移行していく。

いまだ当該地域で行われている「野遊び」は、生業活動の傍らにあって、経済的には副次的であっても、担い手は情熱をもって、また誇りをもって取り組むことのできる行為であり、人間と自然との関わりのなかで、「生業」とは異なる重要な意味をもつ営みであることが見て取れた。

素手の技で自然に立ち向かい、自然と共生してきた「野遊び」は、一方で、厳しい自然と対峙しながら、いわば機械の技をもってその自然を克服してきた「生業」へと分化していく。

「遊び、野遊び」は、人間が自然の一部であり続けながら、自然との「闘い・ゲーム」のなかで、いかに自然と共存・共生していけるかの、大切な営みであった。また、「遊び、野遊び」は、「大人になってもずっと遊んでいたい」という住民の声にもあるように、自然と共にあり続ける生活の豊かさ、すばらしさを探求する人間の姿であり、その「遊び、野遊び」を可能にさせてきたものが、まさに豊かな自然、豊かな生活文化に他ならない。

「遊び」「野遊び」「生業」は、人間の一生において断続的なものではなく、人間の成長とともに、生活における比率や技術・技能的段階を変えながら、一連の流れとして存在し、進化し続けてきたものである。そうした「遊び」「野遊び」「生業」のとらえ方こそ、地域における生活の豊かさ、自然の豊かさを形成していくための不可欠な視点であると考えられる(図1)。

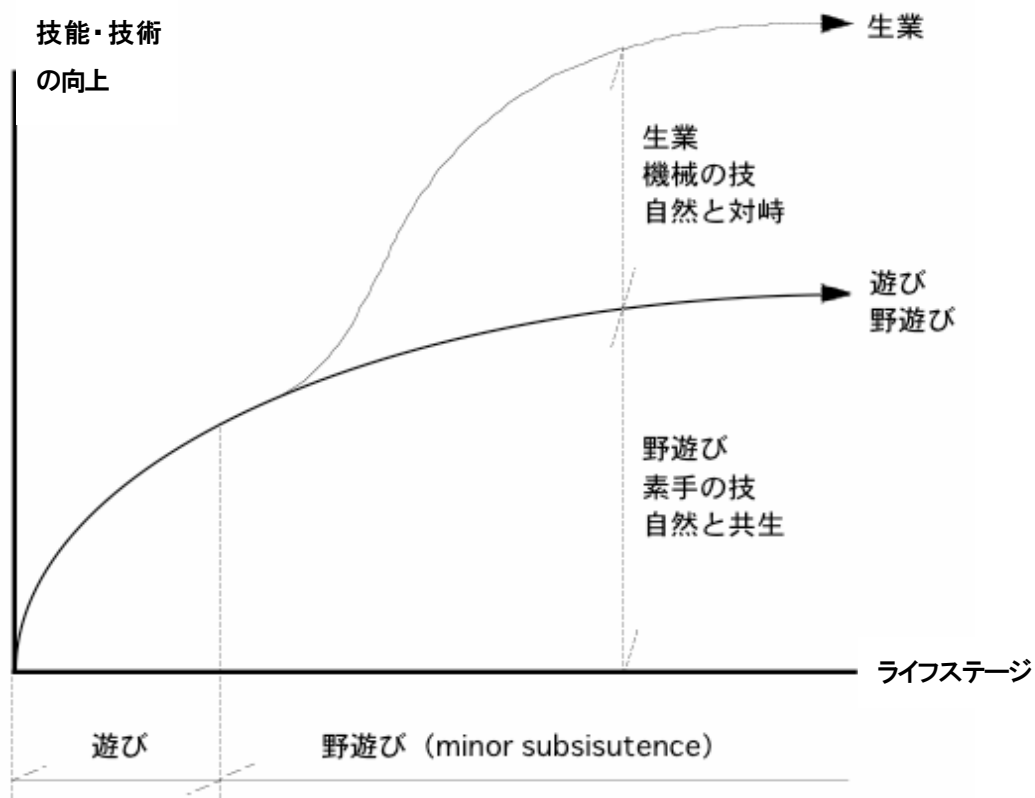


図1 生涯における遊び・野遊び・生業の変遷

## 5. 野遊びの調査事例

5-1)三野勲さん(48)宮津市養老地域、長江在住(調査日:2005年3月20日)



図2 タコ釣りの疑似餌



図3 箱めがね



図4 刺し網と三野氏の舟



図5 左から、ワカメ取り用カマ、サザエ・アワビ・ナマコ採り用のタモ、さざえ・アワビ採り用のヤス、イカツケ(タルイカ採り)用のカギ



図6(左) インタビュー風景

図7(右) プラスチック製箱めがねと舟を操るマネキ

- 1) 底刺し網:  $50 \text{ 間}(70 \text{ メートル}) \times 6 = 420 \text{ メートル}$ の網を、ボートをバックしながら海に入れていく。  
春:ホウボウ、カレイ、5-6月:車エビ、夏:レンコダイ、秋:アマダイ(クジ)、ヒラメ、ササガレイ、冬:ソウハチガレイ、マコガレイ、イシガレイ。浮き刺し網はビウオのみ。
- 2) タコ釣り: 食べたいと思ったら、取りに行く。タコの頭が水中で揺れているのを見つけて、採る。梅雨時の雨上がり、水面が鏡のようになり、見つけやすい。タコは、海底で移動して止まると真っ白になる。タコ釣りは、タコ全体が穴や岩場から出てこない、うまく釣れない。1時間くらいの「遊び」。タコは、酢の物、湯がいて冷凍などして食す。食べてもよし、漁協に出してもよし。
- 3) イカ釣り: アオリイカのみ。9月中旬から11月にかけて、日中、竿・リール・ルアーで、舟で釣る。夜は「イカツケ」と言って夕方から夜の12時くらいまで。満月の時が、海の透明度がよく、擬餌針が光りやすい。「ビシ(おもり)」で深さ調整する(針とおもりが連なっている)。自分のところで消費か、またはオスソワケ。1年は冷凍でOK。「フクロ(イカの胴体の長さ)」が20センチほどで100杯も釣れる。刺身や干してスルメにする。子どもと一緒に舟に乗せて、櫓の漕ぎ方も小学校から覚えた。
- 4) カニ掘り: ハマチ(スナガニ)は、日中なら掘って採る。夜は、餌を探して走り回るので、追っかけて手で取る。カニは海から来るが、水の中だけでは死んでしまう。小学校の夏休みに入る時期によく採れる(7月中旬)。1-3センチの穴を見つけ、乾いた砂を入れて目印にして掘る。先輩から教えてもらった。6月末から11月上旬。胴こひもと釣り竿を付けて、走らせて遊ぶ。遊んだあとは逃がす。



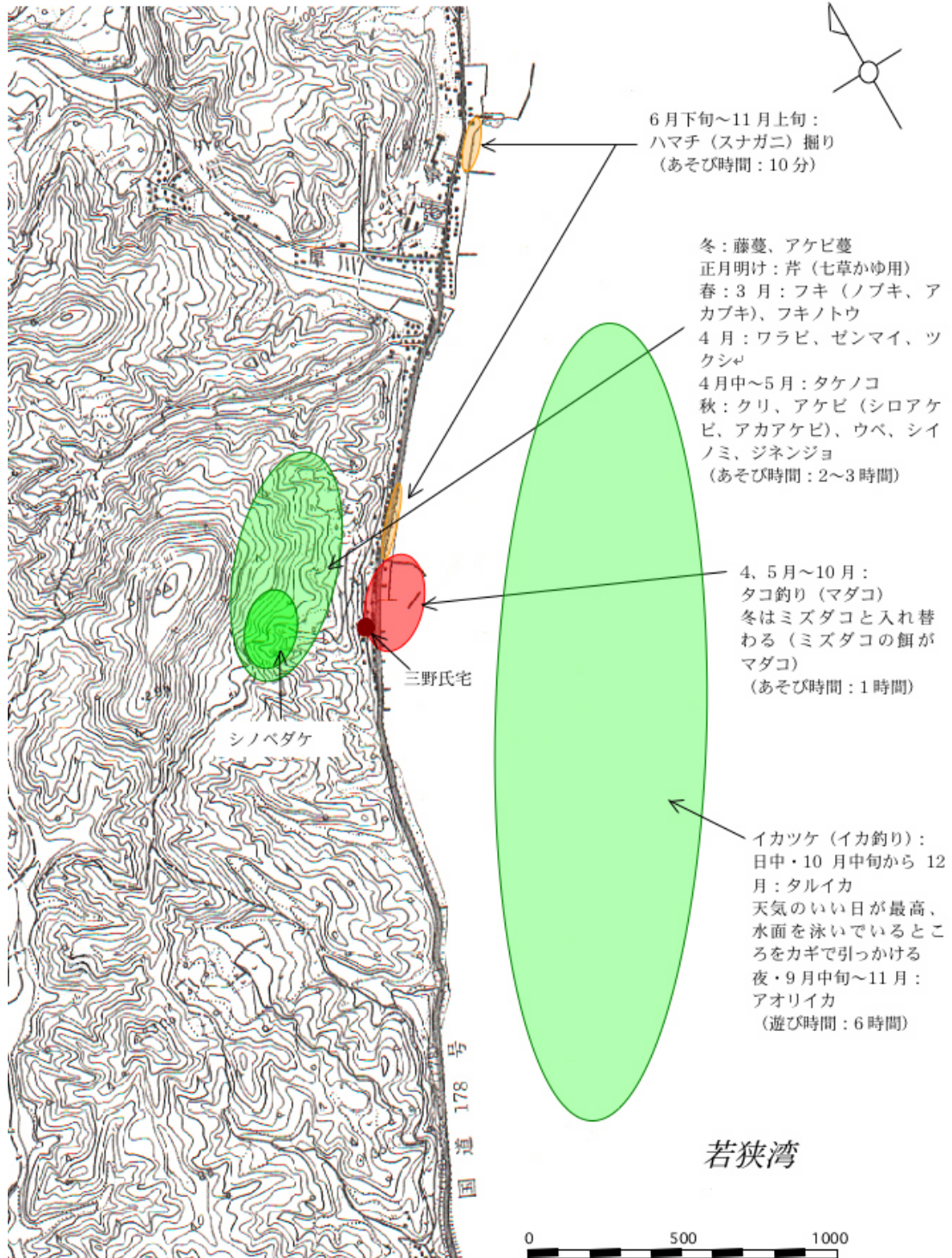


図8 三野さんの「野あそび」フィールド：一年を通して、海の「ハマチ(スナガニ)掘り」「タコ釣り」「イカツケ(イカ釣り)」、山の「蔓や山菜採り」などの「野あそび」が広大な自然のフィールドで続けられている。

5-2)山口貢さん(72)宮津市養老地域、奥波見在住(調査日:2005年10月22-23日)

- 1) 子どもの頃、こぶし大のモクズガニが、波見川ならどこでも、冬以外は採れ、湯がいておやつにした。川岸の穴に穂をつっこみ、つかんだところを捕まえる。田に農薬まかれ、見なくなった。
- 2) 小魚(10センチほど)をドンド(?)で釣った。春から秋まで、波見川で、1時間以上、移動しながら、20-30匹釣った。シノベダケの先に、岩ヶ鼻の百貨店で買った糸と針をつけて釣る。焼いたり炊いたりして食べた。今でもその魚はいる。
- 3) ウナギ釣り。小犀川で。田んぼで前の日にドジョウを捕ってきて、岩ヶ鼻中学の帰りに仕掛けて、次の日に捕る。友達3人ほどでやった。10箇所くらい、川岸の木の枝に、1.5メートルほどの釣りの先にドジョウを餌に、仕掛けた。糸の違い(太



さ、色)で、自分と友達の仕掛けの違いを見分けた。60センチくらいのウナギが2匹くらい捕れ、家で丸ごと網焼きして、砂糖・醤油で味付けして食べた。「桐の木の花が咲く頃、6月頃、よく捕れる。そのころは、桐の木を畑に植え、たくさん見かけた。宮津などから業者が買いに来た。

4) ウサギ捕り。冬場、竹スキー(1.5メートルほどのモウソウダケを火でいぶして前を曲げ、足場用の板を針金で止め、長靴を皮・ひもで固定して滑る。)や木製の市販スキーで山に上がり、近場のケモノミチに、太めの針金で輪を作り、雪上10センチくらいのところに、ちょうどウサギがはねる高さに、木に巻き付けて仕掛けた。毎日見に行き、一冬で10羽くらい捕った。タマネギやショウガと油炒めにしたり、ウサギ汁にした。

5) 山菜採り。

- ① クルミ(10月)。コゴミ(春3月末から月中旬)、フキノトウ(3月中旬-4月はじめ)は、自分の田の近くの川縁で採取し、出荷する。
- ② ゼンマイは、雪の多さによって違うが、4月中旬-4月末に、荒れた田畑に生える。
- ③ ワラビは、4月末-6月にかけて、家の上の畑(500坪)をワラビ畑にしており、出荷する。
- ④ タケノコは、モウソウダケが4月上旬から5月中旬、ハチクが5月中旬-6月はじめ、マダケが6月初旬-7月中旬にかけて収穫できる。
- ⑤ アケビ。白アケビが膀胱炎に効くという。アケビも山葡萄も動物が食べてしまって、ここ15年ばかりは採っていない。
- ⑥ これから、ツヅラカヅラ(蔓細工用)を採りたいが、11月15日から2月中旬まで、狩猟期間で山に入るのは危険とのこと。

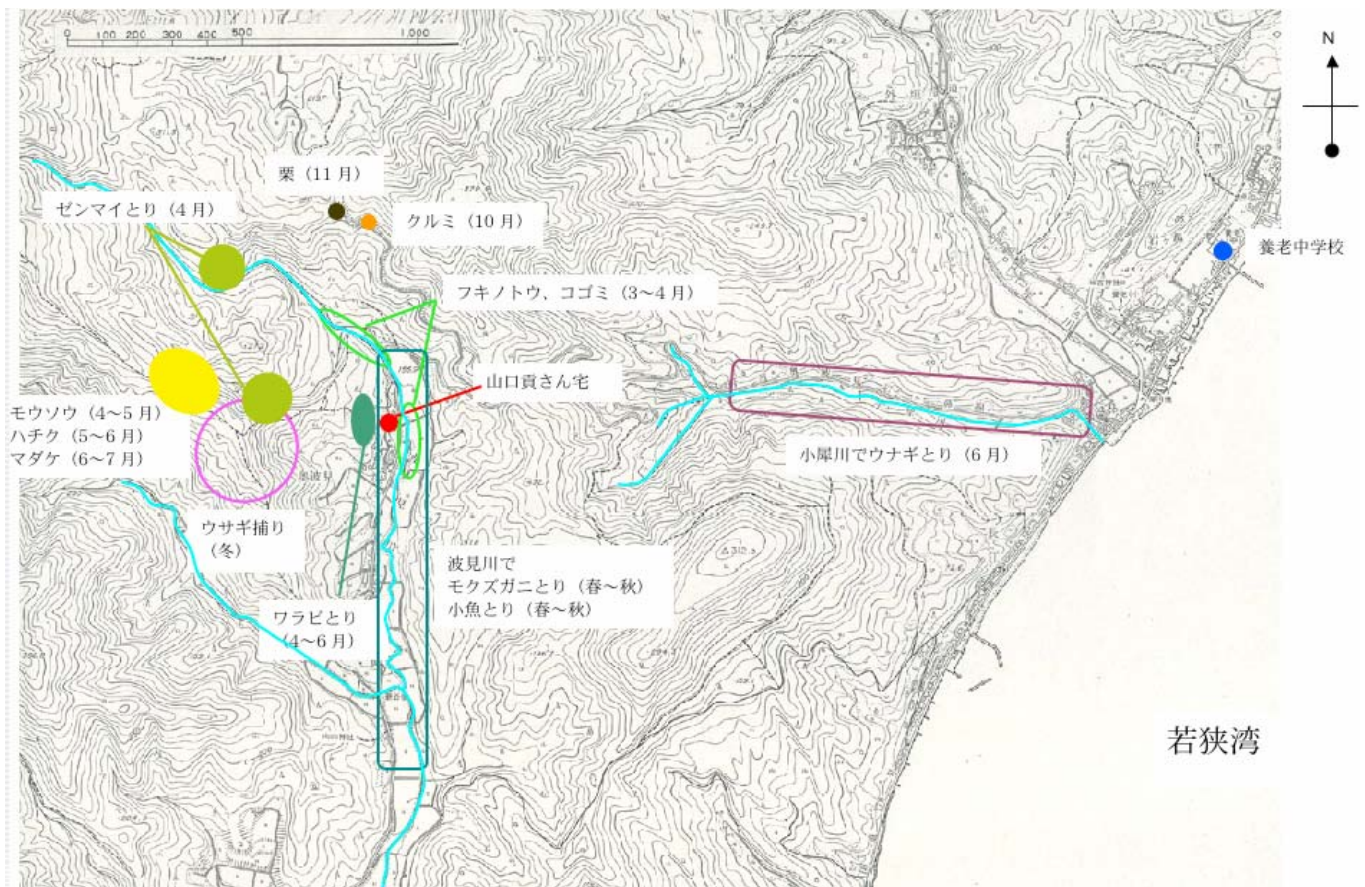


図9 山口さんの「野遊びフィールド」